

## Definiteness and the restrictive relative clause in English

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河村, 道彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026976">https://doi.org/10.14945/00026976</a>

## 英語における定名詞句と制限的關係詞節

Definiteness and the restrictive relative clause in English

河村 道彦<sup>1</sup>

Michihiko KAWAMURA

（令和元年12月2日受理）

### 1. はじめに

定冠詞によって導かれる，制限的關係詞節を含む名詞句の構造と意味について論じる。

一般に，次の例のような制限的關係詞節を含む名詞句において，制限的關係詞節 (*that Jack built*) と主要部名詞 (*house*) の間には修飾語と被修飾語の關係が成り立つと考えられている。

- (1) a. *the house that Jack built.*  
b. *a house that Jack built.*

主要部名詞 *house* が「家の集合」を，關係詞節 *that Jack built* が「ジョンが建てたものの集合」を表すとしたとき，両者を結合することによって生じる *house that Jack built* は交差的に解釈され，「家の集合」と「ジョンが建てたものの集合」の共通部分を表すことになる。これは (a) のように定冠詞 *the* によって導かれる名詞句の場合も，(b) のように不定冠詞 *a* をとる名詞句の場合も変わらない。

一方，關係詞節の機能に関するいくつかの提案において，(a) のように定冠詞に後続する關係詞節と (b) のように不定冠詞に後続する關係詞節の構造や機能を区別するような立場が示されている。例えば，(a) の定冠詞 *the* と關係詞節の間に，ある種の選択關係のようなものを認める分析や，両者の限定機能に違いを認める分析がこれにあたる。これらの提案には十分な言語事実に裏付けられているとは必ずしもいえない面があり額面通りに受け取ることはできないが，一方で標準的な分析ではとらえることのできない何らかの一般化を記述しようとする試みとみられることもできる。本稿では，このような立場から，これらの提案を標準的な分析との比較において論じ，問題の所在が制限的關係詞節による修飾ではなく，定冠詞の意味論にあることを明らかにする。

以下では，誤解の生じない範囲において，(1a) のように定冠詞と共起する制限的關係詞節を定制限節，不定冠詞と共起する制限的關係詞節を不定制限節と呼ぶ。なお，この呼び方は単に可読性を高めるための便宜的なもので，理論的な意味合いはない。

---

<sup>1</sup> 英語教育系列

## 2. 制限的關係詞節を含む名詞句の構造

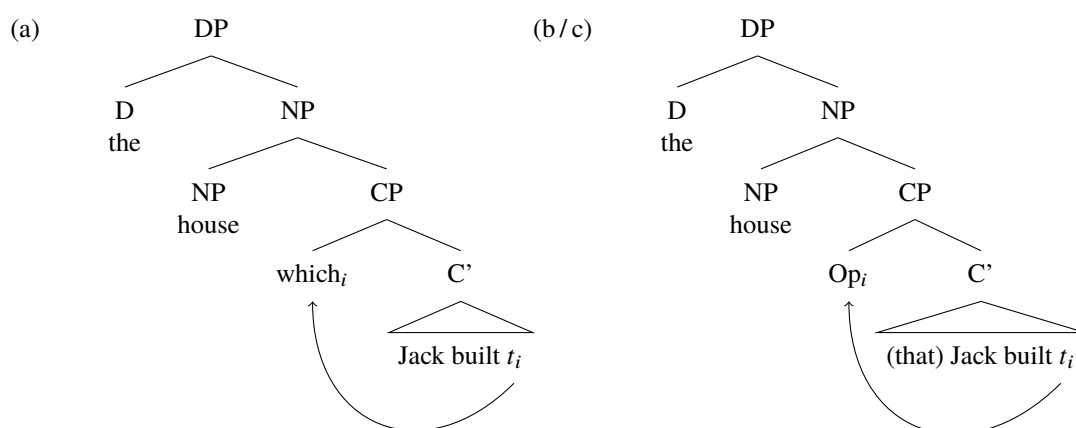
制限的關係詞節には次の3つのタイプがある。構成意味論の立場から、これらの關係詞節を含む名詞句の意味に関する標準的な分析を概観する。

- |     |    |                                |             |
|-----|----|--------------------------------|-------------|
| (2) | a. | the [house [which Jack built]] | (wh 關係詞節)   |
|     | b. | the [house [that Jack built]]  | (that 關係詞節) |
|     | c. | the [house [Jack built]]       | (裸關係詞節)     |

本稿で標準的な分析として取り上げるのは、以下のような仮定に基づく分析である (Quine 1960, Partee 1975)。

- 制限的關係詞節は、主要部名詞を修飾する付加語である。
- 制限的關係詞節は、交差的解釈をもつ修飾語である。

關係詞節を含む句の意味がどのように生じるかを論じるには、まず關係詞節を含む句の構造がどのようになっているかということから論じなければならない。ここでは、名詞句の DP 分析に基づいて、以下のような分析を仮定する。<sup>2</sup>

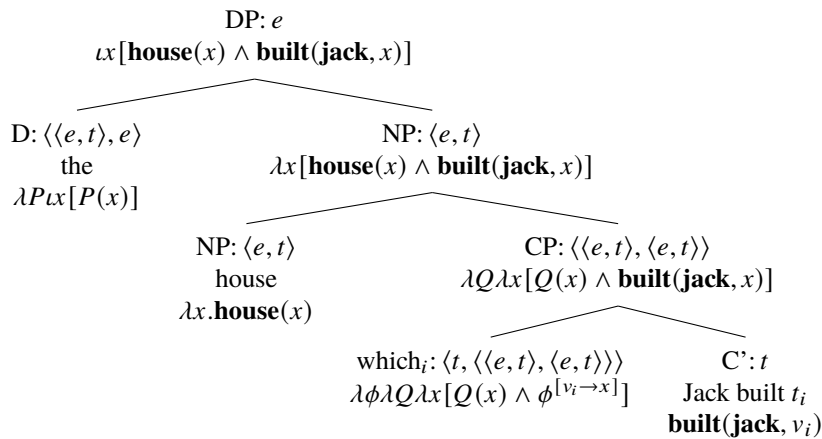


關係詞節は CP 構造をもち、主要部 C の位置には音形をもつ wh 句のほか、wh 關係代名詞と同様の役割をもつ音形を持たない演算子 Op が生起することが可能である。that は意味的に空な補文標識であり、後者とのみ共起することができる。(a) のような wh 關係詞節では、wh 句が關係詞節内の空所の位置から CP の指定部へ移動する。(b) の that 關係詞や (c) の裸關係詞節の場合は、Op が wh 關係代名詞と同等の役割を果たす。これにより、上の3つのタイプの關係詞節は、いずれも同一の構造と解釈をもつものとして扱われることになる。

<sup>2</sup> 名詞句に相当する統語範疇を DP、その主要部 D の補部の位置に生じる名詞類を NP で表しているが、それらに言及する際には、特に誤解の生じない限り、引き続き伝統的な名称である「名詞句」、「主要部名詞」を使用することとする。

次に、この統語構造に基づいて制限的關係詞節を含む名詞句の意味がどのように計算されるかを、(a) の *wh* 關係詞節を例に見てゆくことにする。なお、ここで提示される分析は、論理式への翻訳をもって意味を表すという点を除けば、基本的に Heim & Kratzer (1989) のものと同じである。

まず、關係詞節内の痕跡  $t_i$  は個体変項  $v_i$  として解釈される。C' が表す、この変項を含む命題を、關係代名詞 *which* が導入する  $\lambda$  演算子が束縛することによって、CP の表す關係詞節全体に、主要部名詞と結合可能な修飾語の解釈が与えられる。



この修飾語 *which Jack built* は主要部名詞 *house* と結合することにより、両者の連言によって表される交差的な解釈がえられる。

- (3)
- |    |                            |  |
|----|----------------------------|--|
| a. | [[house]]                  | = $\langle x   x \text{ is a house} \rangle$                             |
| b. | [[which Jack built]]       | = $\langle x   \text{Jack built } x \rangle$                             |
| c. | [[house which Jack built]] | = [[house]] $\cap$ [[which Jack built]]                                  |
|    |                            | = $\langle x   x \text{ is a house} \wedge \text{Jack built } x \rangle$ |

そして、最終的には定冠詞 *the* と結合し、その唯一性により、交差的な解釈を満たす唯一的な指示対象を表すことになる。

關係詞節は制限用法の形容詞と同じ  $\langle \langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle \rangle$  タイプの意味をもっており、時制を無視し両者に交差的な解釈を仮定すると、次の (a) は (b) は同義ということになる。

- (4)
- |    |                          |           |
|----|--------------------------|-----------|
| a. | the tulip that is yellow |           |
| b. | the yellow tulip         | (安井 2000) |



ような局面レベルの解釈を表す。

- (7) a. They've finally found a responsible person (e.g. to walk the dog).  
 b. They've finally found a person responsible (e.g. for walking the dog).  
 c. They've finally found a person who was responsible (e.g. for walking the dog).

前位用法の形容詞と制限的關係詞節の違いは個体レベルか局面レベルかの違いに留まらない。前位用法の形容詞には、制限的關係詞節では表すことのできない非交差的な修飾が可能である。ここではその一例として下位区分的修飾をあげる。<sup>3</sup> 前位用法の形容詞 *beautiful* は (8b) の制限節と同義の交差的な解釈に加えて、「ダンサー」から「踊りの美しいダンサー」を作り出す、下位区分的形容詞の解釈をもつ。この解釈のもとで美しいのはダンスであってダンサーではないため、(9b) の関係が成り立つ。Bolinger (1967) はこのような修飾を、名詞の表す概念を修飾するものであるという考えから指示修飾と呼び、交差的修飾語の表す指示物修飾と区別している。

- (8) a. Mary is a beautiful dancer. (交差的解釈／下位区分的解釈)  
 b. Mary is a dancer who is beautiful. (交差的解釈)  
 (9) a.  $[[\text{dancer who is beautiful}]] = [[\text{dancer}]] \cap [[\text{beautiful}]]$   
 b.  $[[\text{beautiful dancer}]] \subseteq [[\text{dancer}]]$   
 $[[\text{beautiful dancer}]] \not\subseteq [[\text{beautiful}]]$

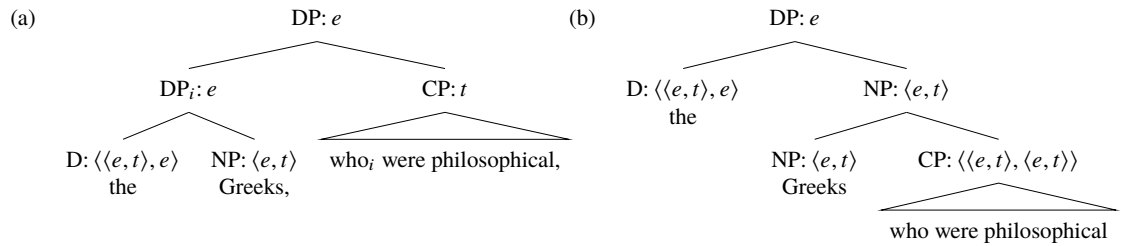
前位形容詞句と制限的關係詞節のもう一つの相違は、前者には制限的な解釈に加え非制限的な解釈も可能である点である。例えば次の文は、交差的な前位形容詞 *philosophical* のとりうる2つの解釈に応じて、日本語の「哲学的なギリシャ人は話し好きだった」という文と同様に、「ギリシャ人は哲学的で、話し好きだった」という(a)の非制限的關係詞節に対応する意味と、「ギリシャ人の、哲学的な人たちは話し好きだった」という(b)の制限的關係詞節に対応する意味をもつ。

- (10) The philosophical Greeks liked to talk. (Bach 1968)  
 a. The Greeks, who were philosophical, liked to talk.  
 b. The Greeks who were philosophical liked to talk.

本稿では非制限的關係詞節の詳細には立ち入らないが、主節とは独立した命題を表し、制限的關係詞節とは統語的にも韻律的にも明確に区別されるものであると仮定する。<sup>4</sup>

<sup>3</sup> その他の非交差的な解釈については Kamp & Partee (1995) や Cinque (2014) などを参照されたい。

<sup>4</sup> 制限的關係詞節と非制限的關係詞節の基本的な相違については McCawley (1998) を、非制限的關係詞節の構成的な意味分析については Potts (2005) を参照されたい。



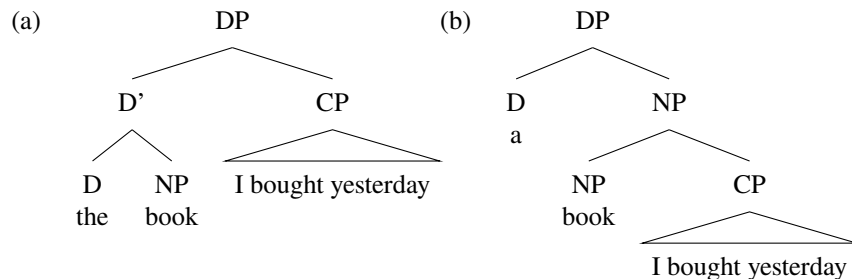
以上、制限的關係詞節は個体レベルの叙述も局面レベルの叙述も表しうる交差的な修飾語であること、前位形容詞と異なり非制限的な用法をもたず、常に非交差的に解釈されるものであることを確認した。これをもとに次節以降、冠詞の定性と制限的關係詞節の制限性に関する幾つかの提案について論じていく。

### 3. 定制限節と不定制限節

安井 (2000) は、定冠詞か不定冠詞かという 1 点においてのみ異なる、次のような制限的關係詞を含む名詞句を比較し、(a) のような定制限節は、(b) のような不定制限節と異なり、先行詞の適用範囲を限定する機能をもたないと主張する。

- (11) a. the book I bought yesterday  
 b. a book I bought yesterday

安井は不定制限節に交差的解釈に基づく標準的な分析を想定する一方で、定制限節については「従来の正統的な分析にはなじまないが、the book I bought yesterday を構造分析するなら、book と the ... (that) I bought yesterday とに二分されることになる。... 端的に言うなら、定名詞句に続く關係詞節の用法は、「定冠詞 the の中身を指定するもの」ということになるであろう。」(p. 579) と、通常とは異なる統語構造の必要性を示唆している。本稿では、この考えを the が NP に加え CP を補部にとる、次の (a) の構造によって具体化してみることにする。なお、(b) は不定制限節が交差修飾語として働く標準的な構造である。



このように關係節を限定詞の補部とする分析は、生成文法の最も初期の段階で採用されていた考えで、Smith (1964) はこれにより any と非制限節、固有名詞と制限節の間の共起制限を記述している。

- (12) a. \*John who is from the South hates cold weather.  
 b. \*Any book, which is about linguistics, is interesting. (Smith 1964)

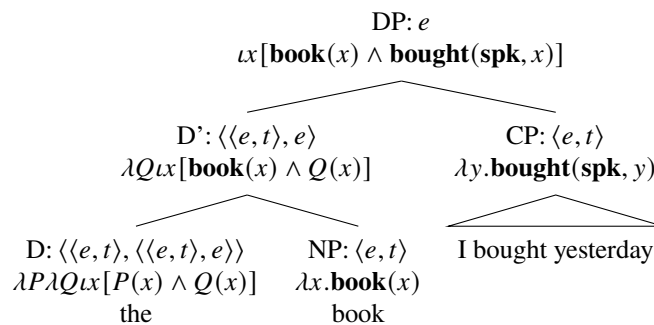
限定詞と關係詞の相關は、次のような比較構文の分析においても必要とされるであろう。

- (13) a. I bought [DP as many books [CP as I wanted]]  
 b. I bought [DP more books [CP than I can read in a lifetime]]

次に、この構造において定制限節を含む名詞句の意味がどのように分析されるかの考察に移りたい。安井は (11) の定名詞句と不定名詞句の意味の違いを「吹き出し」と「はみ出し」という比喻を用いて説明する。(11a) の定制限節が表すのは、定冠詞の表す唯一性の具体的な内容であるとしたうえで、これを「定冠詞の吹き出し」と呼ぶ。(11b) の不定制限節が表すのは、主要部名詞だけで表しきれなかった NP の内容で、これを「先行詞の名詞のはみだし」と呼んでいる。

定制限節が標準的な分析で扱われているような単なる NP 内の修飾要素であるのか、それとも安井が主張するように定冠詞の表す唯一性を構成する要素であるのかは理論的に興味深い問題であるが、このことと定制限節が限定機能を持つか否かは独立した問題である。この点を確認したうえで、安井の想定する定冠詞の意味分析の問題点について論じたい。

まず、次に見るように、制限的關係詞節を the の 2 つ目の補部とする分析においても、これを NP の付加部とする分析をとる場合と同様の、交差的な解釈が可能である (cf. Bach & Cooper 1978)。そして、この交差的な解釈は the の表す唯一性を記述するうえで不可欠なものである。



安井が定制限節に限定機能を認めないのは、(14) の談話の同義性の観察に基づく。(14a) と (14b) を比較し、下線部の名詞句が同一の個体を指示することから「關係詞節が追加されても、先行詞の中身は増えも減りもしない」(p.579) としている。

- (14) a. I bought a book yesterday. The book is about semantics.  
 b. I bought a book yesterday. The book I bought yesterday is about semantics.

ここで留意しなければならないのは、特定の文脈で複数の言語形式が同一の指示対象を表すことができることと、それを表すための表現の意味が同一であることは、また別の問題だということ



ことである。もし (14a) と (14b) の比較をもとに定制限節に指示の限定機能がないのであれば、(15a) と (15b) の比較をもとに主要部名詞 *book* についても、指示の限定機能がないと主張しなければならないだろう。

- (15) a. I bought a book yesterday. It is about semantics.  
 b. I bought a book yesterday. The book is about semantics.

(14) の文脈で同義性が成り立っていたのは、(14b)の制限節の内容が冗長となるような文脈であったからである。したがって、制限節の内容が示差的となる文脈を選べば、このような同義性は消失する。実際、次の (16) の文脈では同義性が成立せず、(16a) から定制限節を除いた (16b) は不適格な談話となる。(16c) のように、主要部名詞の部分で代用形 *one* で置き換えることができるのと対照的である。

- (16) a. I buy books every week. The book I bought yesterday is about semantics.  
 b. I buy books every week. \*The book is about semantics.  
 c. I buy books every week. The one I bought yesterday is about semantics.

これらのことからいえるのは、主要部名詞も定制限節も同様に制限的であり、文脈に応じて新出の内容を表すこともあれば既出の内容を表すこともあるということである。このような振る舞いは、主要部名詞と定制限節の表す内容の交差的な解釈を採る標準的な分析からは予測されるものである。

安井の定制限節は限定機能をもたないという分析は、定制限節は旧情報を表すという関係詞節の情報構造に関する議論に由来するものと思われる。廣瀬 (1995) は、(17) の例をあげ、定関係詞節の表す内容は前提とされ、不定関係詞節が表す内容は断定されると論じている。

- (17) a. This is the book which I bought yesterday. (前提の一部)  
 b. This is a book which I bought yesterday. (断定の一部)  
 (17) a. I bought a book yesterday, and this is it.  
 b. This is a book, and I bought it yesterday.

(17) のパラフレーズから分かるように、定制限節では *I bought a book yesterday* という命題が既知の情報として扱われ、不定定制限節では新しい情報として提示されている。

ただし、このような分析が説明できるのは定冠詞が照応的な用法をもつ場合のみである。まず、(18a) のような唯一的な指示をもつ新出定名詞句の場合、(18') のパラフレーズが成立しないことから分かる通り、既出要素との照応という観点からの説明は困難である。

- (18) This might be the biggest fish he ever caught.  
 (18') He ever caught a biggest fish, and this might be it.

さらに、*the* の照応分析と一見なじみがよさそうな (19) や (20) のような事例においても、情

報構造に基づく分析は関連する言語事実と整合性のある説明を提供することができない。

- (19) a. Chris wants to propose the girl he dated last year.  
 b. Chris wants to propose a girl he dated last year.  
 (20) a. He liked the article which New York Times published last year.  
 b. He liked an article which New York Times published last year.

(19) では、a と the の使い分けによって「クリスが昨年デートした女性の数」に関する意味の対立が生じるが、(19') にこの反映はみられない。また、文脈なしに (20a) を解釈する際、どの記事のことか分からないことに対して感じる違和感は (20'a) では失われている。

- (19') a. He dated a girl last year, and he wants to propose her.  
 b. He wants to propose a girl. He dated her last year.  
 (20') a. New York Times published an article last year. He liked it.  
 b. He liked an article. New York Times published it last year.

これらはいずれも定冠詞の基本的な意味を唯一性でなく、照応性に求めることによって生じる問題である。(19a) の the は該当する女性が 1 人だけであるために使用されているのであり、(20a) の the も話し手と聞き手の間で了解できる唯一的な指示対象の存在を想定したものである。

このような考えを進めると、次のような定制限節を伴う名詞句を「後方照応」と捉える考え方の問題も明らかになる。<sup>5</sup> まず、the の後方に照応先となるような要素はなにもない。主要部名詞も制限節も the の後方に存在するが、これらは the の導く DP の一部である。主要部名詞が先行詞と呼ばれるのは関係代名詞との関連を表すため the の照応とは無縁である。

- (21) the book which I bought yesterday

もっと言うと、the の前方にも照応先となる要素はない。the が代名詞のような照応表現ではなく、単に唯一指示を表すものと考えられるからである。唯一指示の対象が先行する文脈から与えられれば前方照応的と、定名詞句の記述内容から与えられれば後方照応的と解される。いずれの場合も、その唯一性を支えるのは主要部名詞と定制限節の間の交差的な解釈である。

制限的關係詞節が主要部名詞との間に交差的な解釈が成り立つかということ、それが指示対象の絞り込みに寄与するかということは区別して考える必要がある。次の例では話者にとって唯一的な存在である父母を表すのに定制限節が用いられている。

- (22) a. All this I gave up for the mother who needed me. (Quirk et al 1985)

<sup>5</sup> 本稿の分析によれば、後方照応の the とは定制限節を含む名詞句を導く the ではなく、同格を表す the year 2000 や the singer Taylor Swift のような表現ということになるであろう。the の意味論と、一意的識別可能性に基づく定冠詞の意味分析の問題点については、河村 (2012) で論じたのでここでは繰り返さない。

- b. The father who had planned my life to the point of my unsought arrival in Brighton took it for granted that in the last three weeks of his legal guardianship I would still act as he directed. (Huddleston et al 2002)

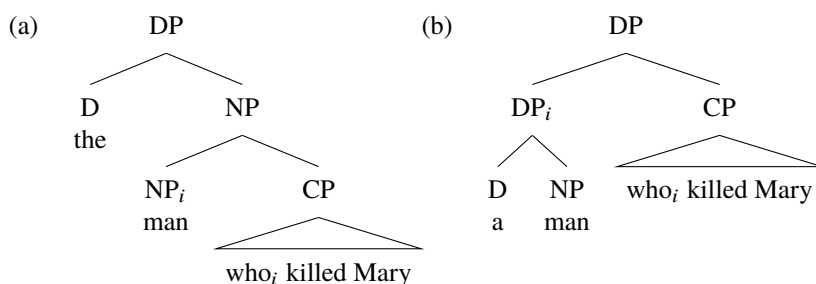
所有格でなく、定冠詞がもちいられていることから、ここに交差的な解釈が成り立っていることが分かる。ここで定制限節が用いているのは交差的な解釈を成立させるためではなく、唯一指示が成立しているからである。ここで問うべきであるのは制限節の制限性ではなく、制限的關係詞節がどのような理由から使用されているかということである。このような観点から、次節では制限節の制限性に関する河野 (2012) の提案を批判的に検討する。

#### 4. 制限節の制限性について

河野 (2012) は制限的關係詞節に制限的なものと非制限的なものが存在するとしうえて、両者が異なる統語構造を持つと主張する。次の (23a) の定制限節は「制限的な關係節」の、(23b) の不定制限節は「非制限的な關係節」の例である。基本的に、定制限節は制限的な關係節として、不定制限節は非制限的な關係節として分析される。

- (23) a. The policeman arrested the man who killed Mary.  
b. The policeman arrested a man who killed Mary.

制限的な關係詞節と非制限的な關係詞節は統語的にも意味的にも区別される。(a) の定制限節は主要部名詞 *man* を先行詞とし、先行詞の表す類を制限し、その下位類を形成する機能を持ち、(b) の不定制限節は冠詞を含む名詞句 *a man* を先行詞とし、先行詞の表す個体の属性を叙述する機能をもつという。下の樹形図からも分かるように、關係詞節を冠詞が導く DP の内部に置くか否かで、制限性を表している。<sup>6</sup> 前節の安井 (2000) の分析で示唆された同様の構造と定・不定の組み合わせが逆であることが興味深い。



以下では、定制限節を含む名詞句、不定制限節を含む名詞句の分析について、それぞれ問題点を指摘したい。まず、定制限節が主要部名詞の表す類を限定するという説が誤りであることを示したい。第2節でみたように、制限的關係節は前位形容詞と意味タイプこそ同じであるが、その修飾機能は大きく異なる。Isac (2003) は前位形容詞に見られる下位区分的な内包的解釈と

<sup>6</sup> 河野 (2012) では DP, NP, CP の代わりに、それぞれ NP, N', S が用いられている。

交差的な外延的解釈の両義性が叙述用法においても成り立つとしたうえで、制限的關係詞節はこのような曖昧性を持たず、常に外延的に解釈されると指摘している。例えば、次の (24a) の定制限節 *who is beautiful* は、(b) の前位用法の *beautiful* と異なり「踊りが美しいダンサー」という下位区分的な解釈を表すことがない。(c) の叙述用法の *beautiful* に「踊りが美しい」という内包的な解釈が可能なることから、外延的解釈のみが可能なのは制限的關係詞節の特性によると考えることができる。このことから、制限的關係詞節は、定制限節であるか不定制限節であるかに関わらず、外延的解釈をもつものと考えることができる。

- (24) a. the dancer who is beautiful (美しい／\*踊りの美しい)  
 b. Maria is a beautiful dancer. (踊りの美しい／美しい)  
 c. The dancer is beautiful. (踊りの美しい／美しい)

次に、非制限的な制限的關係節の存在について考えてみよう。河野はその論拠として次の例をあげている。(25) の下線部の關係詞節は、*that* が用いられていることから分かるように、統語的には明らかに制限的關係節である。

- (25) This narrative establishes a date that then acts as the anchor for the interpretation of the tenses used. (Hornstein 1991, 11)

河野は *that* に後続する *then* を先行命題と継起する独立命題を表すものであると規定し、意味機能上は非制限的な關係節と同じ役割を果たすと主張する。確かに、次の例のように非制限節や代名詞を使った独立した文で置き換えても命題内容に大きな違いは生じない。

- (25) a. This narrative establishes a date, which then acts as the anchor for the interpretation of the tenses used.  
 b. This narrative establishes a date. It then acts as the anchor for the interpretation of the tenses used.

しかし、ここで疑問に思わなければならないのは、制限節と非制限節が同様の意味を表しうるからといって、両者に同様の意味や構造を与える必要があるのかという点である。次の例と比較してみよう。標準的な分析に従えば、形容詞も制限的關係詞節も主要部名詞を修飾する付加語であり、(25) と (25a, b) の関係は (26) と (26a, b) の関係と平行的である。このとき、言い換え可能性を論拠に (26) の *yellow* が非制限的であるとするようは主張は通常は考えられない。不定制限節に関する主張も同様に理解されるべきである。

- (26) We planted a yellow tulip.  
 a. We planted a tulip, which was yellow.  
 b. We planted a tulip. It was yellow.

Huddleston et al (2002) は、次の例のように、不定冠詞によって導かれる名詞句に制限節と非

制限節の両方が可能な場合、どちらを使うか決めるのは情報構造の問題であると指摘している。

- (27) a. She had two sons who were studying law at university and a daughter who was still at high school.  
 b. She had two sons, who were studying law at university, and a daughter, who was still at high school.

この点を考慮に入れて、河野のあげる Hornstein からの抜粋を後続する文脈とともに見てみよう。

- (28) This narrative establishes a date that then acts as the anchor for the interpretation of the tenses used. The time of Napoleon's inspection of the troops is the day of the Battle of Borodino, in 1812. The battle discussed, though in the future relative to the time of the narrative, is in the past relative to the moment of speech. (Hornstein 1991, 11)

下線を付した第1文の内容全体を後続する2つの文が詳述する形になっており、詳述の対象を制限節を用いて1つの文で表すことにより、パラグラフ全体の修辞関係を明快にすることに役立っている。

以上、定制限節と不定制限節の相違を両者の表す制限性の強さや非修飾要素の相違として表す分析の問題点を指摘し、標準的な分析の優位性を確認した。

## 5. まとめ

定冠詞 *the* によって導かれる名詞句内に生じる制限的關係詞節の構造と意味について論じた。制限的關係詞節を交差的な解釈をもつ付加語とする標準的な分析と、定制限節と不定制限節の機能に着目し両者を構造的・意味的に区別する幾つかの提案を比較し、後者のもつ具体的な問題点の検討を通じて、定制限節と不定制限節の区別は、制限的關係詞節の制限性ではなく、定冠詞の表す唯一性の問題であることを示した。

## 参考文献

- Abbott, Barbara. 2004. Definiteness and indefiniteness. In Laurence R. Horn & Gregory Ward (eds) *The handbook of pragmatics*, 122–149. Oxford: Blackwell.
- Bach, Emmon. 1968. Nouns and noun phrases. In Emmon Bach & Robert T. Harms (eds.) *Universals in language*, 90–122. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Bach, Emmon & Robin Cooper. 1978. The NP-S analysis of relative clauses and compositional semantics. *Linguistics and Philosophy* 2, 145–150.
- Bolinger, Dwight. 1967. Adjectives in English: attribution and predication. *Lingua* 18, 1–34.
- Cinque, Guglielmo. 2014. The semantic classification of adjectives. A view from syntax. *Studies in Chinese Linguistics* 35, 1–30.
- Christophersen Paul. 1939. *The articles: a study of their theory and use in English*. Copenhagen: Munksgaard.

- Hawkins, John A. 1978. *Definiteness and indefiniteness: A study in reference and grammaticality prediction*. London: Croom Helm.
- Hawkins, John A. 1991. Implicatures and (un)grammaticality prediction. *Journal of Linguistics*, 27, 405–442.
- Heim, Irene. 1982. *The semantics of definite and indefinite noun phrases*. University of Massachusetts, Amherst dissertation.
- Heim, Irene. 2011. Definiteness and indefiniteness. In Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn & Paul Portner (eds), *Semantics: An international handbook of natural language meaning*, vol. 2, 996–1025. Berlin: de Gruyter.
- Heim, Irene & Kratzer, Angelika. 1998. *Semantics in generative grammar*. Oxford: Blackwell.
- 廣瀬幸生. 1995. 「關係節」. 斎藤武生・原口庄輔・鈴木英一 (編) 『英文法への誘い』, 231–146. 東京: 開拓社.
- Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson. 1973. On the applicability of root transformations, *Linguistic Inquiry* 4, 465–497.
- Hornstein, Norbert. 1990. *As time goes by: Tense and universal grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Huddleston, Rodney, Geoffrey K. Pullum & Peter Peterson. 2002. Relative construction and unbounded dependencies. In *The Cambridge grammar of the English language.*, 1031–1096. Cambridge: Cambridge University Press.
- Isac, Daniela. 2003. Restrictive adjectives vs. restrictive relative clauses: An asymmetry within the class of modifiers. In Anne-Marie Di Sciullo (ed) *Asymmetry in grammar, vol. 1: syntax and semantics*, 27–49. Amsterdam: John Benjamins
- 石田秀雄. 2002. 『わかりやすい英語冠詞講義』. 東京: 大修館書店.
- 石田秀雄. 2012. 「制限的關係詞節の先行詞には必ず the をつけなければならないのか」. 藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美 (編) 『最新言語理論を英語教育に活用する』, 74–83. 東京: 開拓社.
- Kamp, Hans & Barbara Partee. 1995. Prototype theory and compositionality. *Cognition* 57, 129–191.
- 河村道彦. 2012. 「英語冠詞の定性と意味記述」. 『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』, 42, 74–83
- 河野継代. 2012. 『英語の關係節』. 東京: 開拓社.
- Larson, Richard K. 1998. Events and modification in nominals. *Semantics and Linguistic Theory* 8, 145–168.
- Löbner, Sebastian. 1985. Definites. *Journal of Semantics* 4, 279–326.
- McCawley, James D. 1998. *The syntactic phenomena of English*. 2nd edn. Chicago: Chicago University Press.
- Partee, Barbara H. 1975. Montague grammar and transformational grammar. *Linguistic Inquiry* 6, 203–300
- Poesio, Massimo & Renata Vieira. 1998. A corpus-based investigation of definite description use. *Computational Linguistics* 24, 183–216.
- Potts, Christopher. 2005. *The logic of conventional implicature*. Oxford: Oxford University Press.
- Quine, W. V. O. 1960. *Word and object*. Cambridge, MA. MIT Press.

- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Roberts, Craige. 2003. Uniqueness in definite noun phrases. *Linguistics and Philosophy* 26, 287–350.
- Russell, Bertrand. 1905. On denoting. *Mind* 14, 479–493.
- Smith, Carlota S. 1964. Determiners and relative clauses in a generative grammar of English. *Language* 40, 37–52.
- Sproat, Richard & Chilin Shih. 1991. The cross-linguistic distribution of adjective ordering restrictions. In Carol Georgopoulos & Roberta Ishihara (eds.) *Interdisciplinary approaches to language: Essays in honor of S.-Y. Kuroda*, 565–593. Dordrecht: Kluwer.
- Strawson, P. F. 1950. On referring. *Mind* 59, 320–344.
- Thompson, Sandra A. 1970. The deep structure of relative clauses. In Charles J. Fillmore & D. Terence Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, 78–94. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 安井 稔. 2000. 「関係詞節とその先行詞」. 『英語青年』 146, 578–582.
- Vender, Zeno. 1967. Singular terms. In *Linguistics in philosophy*. 33–69. Ithaca: Cornell University Press.